西日本新聞　2021年3月29日

月曜日　西日本新聞　（第3種郵便物認可）

■AYA世代に多いがん　□は希少がん

	1位	2位	3位	4位	5位
15～19歳	白血病	胚細胞腫瘍 性腺腫瘍	リンパ腫	脳腫瘍	骨腫瘍
20～29歳	胚細胞腫瘍 性腺腫瘍	甲状腺がん	白血病	リンパ腫	子宮頸がん
30～39歳	女性乳がん	子宮頸がん	胚細胞腫瘍 性腺腫瘍	甲状腺がん	大腸がん

※国立がん研究センター資料より作成

■AYA世代のがん経験者の悩み

※「AYAがんの医療と支援のあり方研究会」資料より作成

医療いのち

1人じゃないよ　AYA世代

「若年がん孤立化防げ」広がる

さまざまな悩み　治療と相談で支え

15～39歳の「AYA世代」のがん患者に対する支援の遅れが指摘されている。進学、就労、結婚、出産、育児などと重なる時期。治療が人生を左右しかねないのに支える態勢は十分ではなく、患者は孤立しがちだ。2018年に策定された国の第3期がん対策推進基本計画にも支援の必要性が盛り込まれ、各地で少しずつ取り組みが始まっている。（編集委員・下崎千加）

「ハローワークの職業訓練を受けるか迷っているんだけど」「どんな？」「パソコン技術とか」「体力なくてもできるよね」…

福岡市南区の九州がんセンター（411床）の一室。AYA世代の患者と若手医療者による毎月恒例のおしゃべり会だ。9日は20～30代の患者5人と、医師や臨床心理士ら4人の計9人が参加。18年から有志が集まって開いてきた。新型コロナウイルスの影響を受けた昨年から、通院患者は自宅からオンラインでも参加できるようになった。

この日の話題は、仕事、恋愛、再発の不安、コロナ下の気分転換など多岐にわたった。調理師資格を持つ患者が「調理の仕事は体力勝負で復帰が難しい」と吐露する一方、「コロナで勤務先が在宅勤務を導入してくれ助かった」と明るく話す患者もいた。

白血病の治療で入院中に参加した舛岡曜さん（33）は「同じ世代の人と話す機会がないので、いい気分転換になった」。今、一番の気掛かりは、勤務先の休職期間が満了となる今年秋までに、骨髄移植のドナーが見つかって職場復帰できるかどうかだという。

＊

AYAは「Adolescent & Young Adult」（思春期と若年成人）の略。この世代のがん罹患者数は年間約2万人で、全罹患者の約2・5%に過ぎない。がんの種類は、胚細胞腫瘍・性腺腫瘍・精巣・卵巣や体の中心部や脳などにできるがん」やリンパ腫など、人口10万人当たり6例未満の「希少がん」が多い。診断に時間がかかったり、専門医が少ないために治療が難航したりするケースがある。

抗がん剤や放射線治療などの影響で不妊になる人もいる。将来子どもをつくる選択肢を残し、希望を持って治療に臨むため、治療前に卵子や精子などを凍結保存する「妊孕性温存療法」が近年、施されるようになった。九州では各医療機関から紹介を受け、不妊治療をする大学病院や専門クリニックで実施。4月からは国の助成が受けられる。治療だけでなく、復学や就労など多様なサポートが求められ、医師、看護師、臨床心理士、ソーシャルワーカーらが、職種の連携とそれぞれの力量が問われる。九州がんセンターや九州大病院（福岡市東区）では18年度、AYA世代の支援チームがそれぞれ発足、支援に携わる。ただ、スタッフ不足などで支援や情報が患者に行き届かない医療機関も少なくない。

＊

「医療者は命を救うだけでなく、人生も救わなくてはいけない。それが十分できていないと感じている」と話す「九大病院でAYA支援を担当する古賀友紀准教授（小児科）は話す。

診断が遅れ、九大に紹介されてきた際にはがんが進行し、すぐ治療を始めなくてはいけないため、妊孕性温存の時間が取れなかった患者がいた。高校との調整不足で留年せざるを得なくなった患者もいる。

経済的な困難もつきまとう。19歳までは小児慢性特定疾病の医療費助成を受けられ、40歳以上は介護保険制度で在宅療養費の自己負担が軽くなるが、20～39歳はそれらの対象外だ。高額療養費制度を利用しても入院費と通院費で月10万円を超える患者もおり「お金がないからあまり検査しないで」と頼まれることもあるという。

親から経済的、精神的に自立したい時期にそれもかなわず、後遺症や再発が心配で恋愛や結婚にも臆病になる。そうした悩みを打ち明ける同世代の患者にもなかなか巡り合えない。

古賀准教授は「治療技術の向上だけでなく、治療費の公的支援や相談態勢を充実させ、AYA世代が孤立しないようにする必要がある」と訴えている。

九州がんセンターで毎月行われているAYA世代の患者や医療者のおしゃべり会　＝9日、福岡市南区

支援者も悩み、考える

AYA世代のがんの啓発週間「AYAウイーク」（14～21日）の一環で、九州の20病院の支援担当者によるオンライン座談会が19日、行われた。末期患者への緩和ケアの難しさや、支援を巡る温度差などさまざまな悩みが報告された。

九州がんセンター（福岡市）が初めて企画。参加病院への事前アンケートで、妊孕（にんよう）性温存療法は多くの病院で対応しているものの、スタッフ研修や患者の集いなどがほとんど実施されていないことが分かった。「患者が少なく、就労や学習に関する支援が見過ごされている」との指摘もあった。

各病院の発表では、末期患者が在宅療養に切り替える際のスタッフとの認識のずれや、AYAの専門チームがない大学病院では有志が支援をしている現状などが報告された。同センターの園田顕三婦人科医長は「患者にとっては『人生これから』という時で、向き合い方が問われるのに、病院によって取り組みに差があり、支援者まで孤立しがちだ。横の連携を充実させていきたい」と話した。

▶「AYAウイーク」座談会◀

九州各地の病院の支援担当者らが意見交換した座談会＝19日、九州がんセンター

医療面へのご意見、ご感想、情報をお寄せください。「医見異見」への投稿も募集します。紙上匿名はできますが、氏名、連絡先を明記してください。

【ファクス】092（711）6246　【メール】med@nishinippon-np.jp
【郵　送】〒810―8721（住所不要）西日本新聞医療取材班

産経新聞　2021年2月20日

「AYA世代」支援の輪を

九州がんセンター　来月に啓発活動

「AYA世代」と呼ばれる思春期や若年成人のがん患者の課題を知ってもらい、支援につなげようと、九州がんセンター（福岡市）の対策チームが3月14～21日に啓発イベントを開く。九州各地の病院など約30施設が参加を予定し、応援動画の作成や、オンラインによる座談会で若い世代のがんについて発信する。

「AYA」は「Adolescent and Young Adult（思春期と若年成人）」の略で、特にがん治療の現場で用いられる。治療時期が進学や就職などの人生の節目と重なり、患者は病気や治療以外に多くの悩みを抱える。高校生対象の院内学級がないことで、入院で出席日数が足りず、留年や中退につながるケースもある。

イベントは、一般社団法人「AYAがんの医療と支援のあり方研究会」（名古屋市）が同時期に啓発活動を展開するのに合わせて企画した。期間中、患者への応援動画を九州がんセンターのホームページなどで掲載するほか、参加施設で応援フラッグを掲げ、「AYA」という言葉を広く知ってもらうとともに、各施設の連携体制の構築を目指す。

九州がんセンターでは平成30年に対策チームを設け、治療やケアにあたってきた。若い世代は希少がんを患うケースが多く、患者数が少ないため支援施策が追い付いていない現状もあるという。

同センターは「九州の病院が患者を支える仲間という感覚を共有したい」としている。問い合わせは九州がんセンター（092・541・3231）。

読売新聞　2021年3月10日

AYA世代のがん 知って

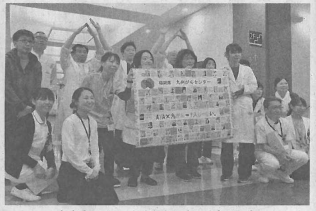
各地でイベント

「AYA（アヤ）世代」のがん患者が抱える課題を知ってもらおうと、全国の医療機関や患者団体などが啓発イベントを実施する「AYAweek2021」が、14～21日を中心に展開される。九州・沖縄でも、オンラインのトークイベントなどが予定されている。

AYAは思春期・若年成人を意味する「Adolescent and Young Adult」の頭文字で、15～39歳にあたる。AYA世代のがん患者は年間約2万人（全体の約2％）と少なく孤立しがち。希少がんが多く、進学や就職、結婚、出産などが重なる時期でもあり、心のケアや経済、就労など多角的な支援が求められている。

こうした実態を知ってもらおうと、医師らでつくる「AYAがんの医療と支援のあり方研究会」（AYA研、名古屋市）が初開催。全国の70を超える団体がそれぞれイベントを行う。

九州・沖縄では、9団体が賛同。福岡市南区の九州がんセンターは、医師や看護師らが「みんなでサポートします」などのメッセージを書き込んだ「応援フラッグ」を作った。呼びかけに応じた九州各地の20病院・団体も制作し、フラッグを紹介する動画をセンターのホームページに掲載。担当者は「医療機関の連携も深めたい」と語る。



応援フラッグを手にする九州がんセンターの医師ら

長崎県の「ながさき女性医師の会」は13日午後3時、がん経験者と医師によるオンライントークイベントを開催。「沖縄県若年性がん患者会Be style」も14日午後2時、20～40歳代で罹患した人を対象にしたお話会をオンラインで開く。福岡市のNPO法人「がんのママをささえ隊ネットワーク ETERNAL BRIDGE」は期間中、がんと向き合う母親とその家族の写真を動画投稿サイト「ユーチューブ」で公開する。

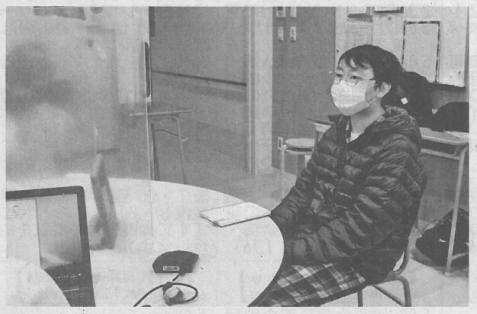
イベントの詳細や参加方法は「AYAweek2021」の特設サイトで確認できる。AYA研の堀部敬三理事長は「治療面や生活支援で多くの課題があることを知ってほしい」と話す。

読売新聞　2021年3月13日

若者同士 がんの悩み語る

孤立防ぎ 月1回集う 南区

15～39歳の「AYA（アヤ）世代」のがん患者の孤立を防ごうと、福岡市南区の九州がんセンターで当事者の集いが開かれている。患者数が少なく、生活面でも様々な課題を抱えており、同センターは「若い世代の患者のことも知ってほしい」と呼びかけている。（饒波あゆみ）



同世代の患者と悩みなどを語り合う舛岡さん

「5月から仕事に復帰します」。9日、同センターで開かれた若者の集い「LIP（リップ）」。自宅からリモートで出席した女性が報告すると、参加者から拍手が上がった。

AYAは思春期・若年成人を意味する「Adolescent and Young Adult」の略。患者数は年間約2万人（全体の約2％）とわずかで、同世代の患者と出会う機会が少ないため、同センターは2018年から月1回、集いを開いている。

この日はオンラインでの参加も含め、20～30歳代の患者や経験者計5人が集まった。「再発が怖い」と口にする人もいれば、「髪の毛が生えてきた」「今は楽しく過ごすよう意識している」と前向きな話をする人も。「病気が分かってショックな中、治療方針や妊娠の可能性をどう残すかなど、いろいろな決断を迫られた」と振り返る場面もあった。参加した舛岡曜さん(33)は、「病気のことを話す機会がないので、いい気分転換になる」と語る。

29歳の時、急性リンパ性白血病と診断された。仕事を休職し、現在は通院治療をしている。「休職できる期間は限られており、復職するにしても、体力が落ちているのでどこまで働けるか心配」と打ち明ける。

この世代は進学や就職、結婚などが続く時期に治療を余儀なくされ、様々な悩みを抱えている。抗がん剤などの影響で子どもを作れなくなる可能性もある。そこで同センターは18年、医師や看護師、医療ソーシャルワーカーらで「AYA世代がん対策チーム」を結成。相談に乗り、利用できる制度を紹介するなど、一人ひとりに合わせた支援を実施している。

対策チームメンバーで臨床心理士の白石恵子さんは「退院後の生活も含め、多職種で連携して寄り添っていきたい」と話す。